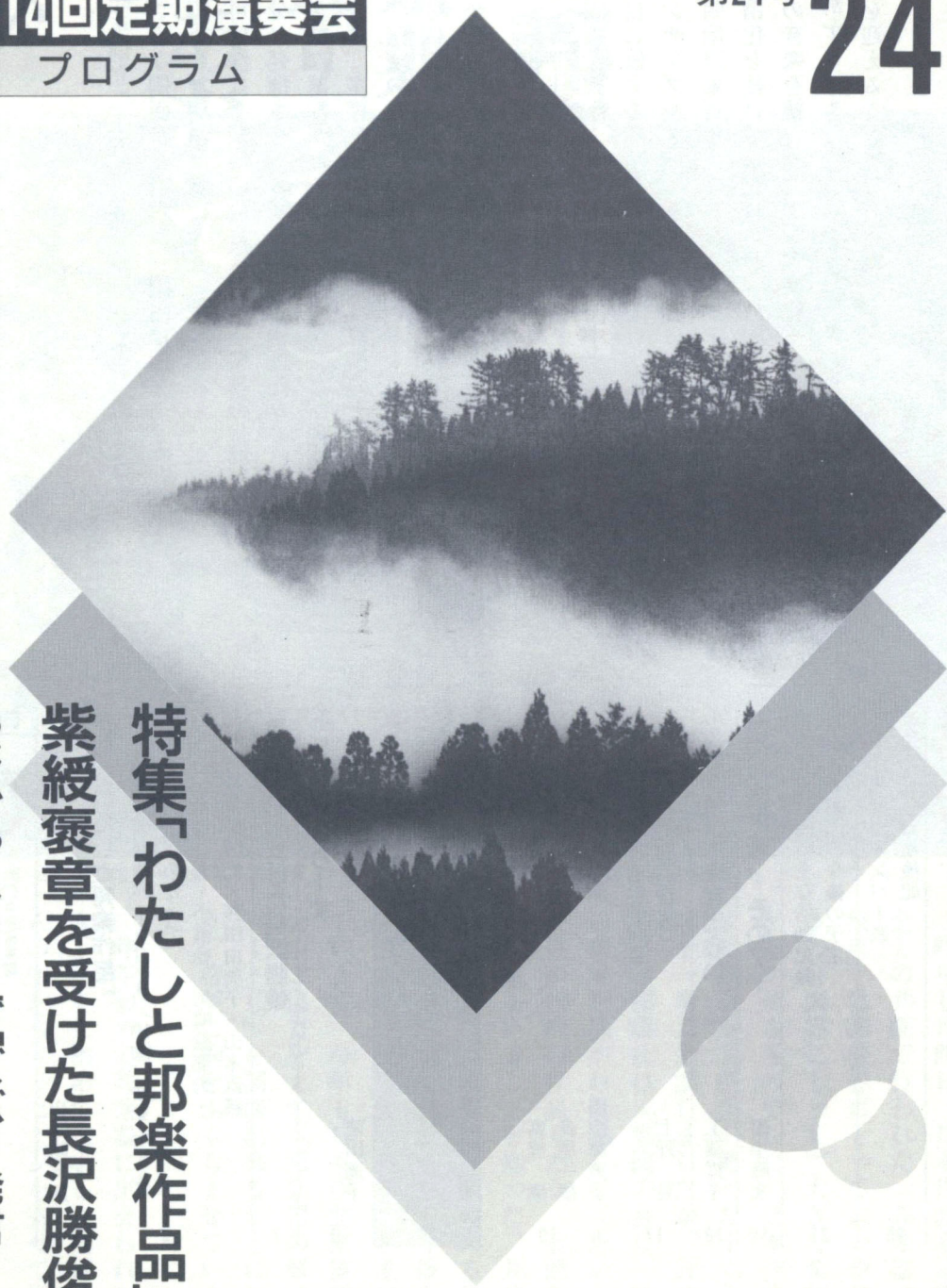


邦楽現代

PRO MUSICA NIPPONIA

第114回定期演奏会
プログラム

第24号 1990年
24 春



特集「わたしと邦楽作品」
紫綬褒章を受けた長沢勝俊
らじかる・しりーず「スバリ発言！」

池田逸子

しらすべ

日本音楽集団は昨年創立二十五周年を迎えた。邦楽器の現代における可能性を様々な側面から追求し、国内はもとより海外にもその成果を紹介した功績は誠に大きいものがある。

邦楽器の現代的な可能性は、楽器の改良、新しい楽器の開発、それらの機能を十分に發揮させ得る新しい作品の創作など、いろいろな角度から多様な試みがなされている。さらに、邦楽器には洋楽器との合奏、多種の民族楽器による規模の大きいアンサンブルなど、伝統のなかに求められない多くの課題があつて、これらに対しても日本音楽集団は多大な成果をあげており、あるいは今後の取組みに大いに期待がかけられるのである。

そうしたなかで、昨年十一月に行われた創立二十五周年記念演奏における韓国の民族オーケストラ、韓国中央国楽管絃楽団との共演は注目に値する素晴らしい成果をあげ、アジアの民族楽器によるアンサンブルという重要な課題に、有力な可能性を示唆した。明治以来百年余にわたり、ヨーロッパ文化圏の音楽の輸入と消化を続けて来た日本が、自国の音楽的伝統とアジア諸民族の音楽を統合したアジア文化圏の新しい音楽創造に重要な役割をもつようになったとき、世界の音楽文化はまた新たな時代を迎えることになろう。

音楽評論家

相澤 昭八郎

目次 ● Contents

しらすべ

相澤昭八郎

1

特集「わたしと邦楽作品」

邦楽器の祭典パートII(9/19(水)パリオホール)
を迎えるにあたって

2

大政直人・小橋稔・川崎絵都夫・
佐藤芳光・西田由美子・山本直純

紫綬褒章を受けた長沢勝俊

7

らじかる・しりーず

〈ズバリ発言〉

池田逸子

9

第114回定期演奏会—プログラム—

一、青の島 二、幽寂の舞 三、風に聴く
四、霜夜の砧 五、彫板

11

日本音楽集団演奏会から

第112回定期

富樫 康

15

第113回定期

長尾一雄

第18次海外公演

田中悠美子

現代日本音楽の夕べⅢ
〈三木稔の世界〉

上野 晃

17

小さな空間大きな出会い

工藤哲子

18

現代邦楽事情 — その7 —

田中隆文

19

日本音楽集団の主な活動記録

日本音楽集団の今後の予定

21

日本音楽集団メンバー表

お知らせ・編集後記

25

特集

わたしと邦楽作品

邦楽器の祭典・パートII

(9/19(水)・バリオホール)

を迎えるにあたって



邦楽器の祭典(第109回定期・1989年7月4日・バリオホール)が終って拍手に応える作曲家たち

昨年七月四日、日本作曲家協議会との共催で行われた「邦楽器の祭典」は邦楽界にとって(いや日本の音楽界にとつて)大きな希望を抱かせるものでした。日本作曲家協議会から提供のあった十六作品を一挙に上演しましたが、評論家の富樫康氏は「集団の会に一陣の新風が注がれた感じで、思いもかけぬ傾向の作品もあり、有能な作曲家もいることを知った。邦楽器へのアプローチに意欲のある作曲家への開かれた窓として今後も続けて欲しい祭典である」と述べています。今年も日本作曲家協議会のご協力をえて「邦楽器の祭典・パートII」を開催出来ることになり、希望に胸をふくらませていきます。

昨年初めて邦楽器に出会われた人、ことし初めてないし二度目の人の中からメッセージを寄せて頂きました。

邦楽事始め



大政直人

私は現在36才ですが、私たちの世代で邦楽に興味があるという人は、まずいないのではないのでしょうか。私自身してあげれば、父親が家に客を迎え、酒を飲んだ時に歌った「貝がら節」が、唯一の邦楽?として耳に残っているぐらいです。この父の歌う「貝がら節」は、子供心にも上手とは思えなかったのですが、まわりの人が「なかなか味わいがありますなあ」などと言っているの聞いて、不思議な気持ちになったものです。もともと大人になってから、調子のはずれた演奏を「味わいがある」と言っただけなのは、便利なフレーズだと気がついた次第です。話がそれましたが、そんなわけて35才になる昨年まで、邦楽

とは無縁の生活を送っていました。それがどうして昨年、日本音楽集団の演奏会のための作品を書いたかと言いますと、この所いっつも書いている無調の現代音楽作品とは別に、アンコールピース的な小品を書きたいという欲求が、私の心の中に芽生えたからなのです。そうした小品を書く事によって、自分の持っているハーモニー感というものを再確認したい、それと同時に聴衆の方に楽しんでもらえるような曲を書くのも作曲家としての使命ではないか、とも考えました。そこにちょうど日本音楽集団が親しみやすい邦楽作品を募集していることを知り応募したわけです。

ところが、邦楽器のための曲を書くことと決めてから、実際に作曲を開始するまでには3ヶ月程かかりました。というの、ふつう作品を書くという場合、実際に演奏する奏者が決まっている事がほとんどなので、いつもはその奏者の音楽性や音色、技術等がよく分っているわけですし、その奏者に愛情を持って作曲しているわけです。ところが、邦楽器の場合、音域も知らなければどういった技術があるのかも知らないという、ほとんど無に近い状態からの出発なので大変苦勞したわけです。もっとも、作曲の開始から完成までの時間は3時間程でした。

そうして私にとって初めての邦楽作品が完成したわけですが、練習と本番を通して感じた事は、奏者の方々が大変熱心に、心のこもった演奏をして下さったという事です。これは、あたりまえのようですが一番大切な事で、今まで仕事で一緒になった奏者の中には、技術は最高なだけれど人間性が伴っていない、という人も何人かいるわけです。そういう人とはたとえスタジオオの仕事であっても、二度と一緒に仕事をしたくないと思ってしまう。すばらしい音楽家に出会う事が、私にとって創作に対するエネルギーを生み出す事になります。

そんなわけで、今年もまたもどもぞと、邦楽作品を書くことにしている私です。

大政直人 略歴

1954年2月4日生まれ。79年東京京学芸大学大学院作曲専攻修了。84年東京芸術大学大学院作曲科修了。野田暉行、住谷智、甲斐説宗の各氏に師事。

現在、日本作曲家協議会、日本現代音楽協会、深新会会員。東京コンセルヴァトアール尚美、講師。

主要作品

- 弦楽四重奏曲第2番「遅咲きの薔薇」(85)
- 弦楽四重奏曲第3番「夕影に舞う風の」(86)
- 「シャコンヌ」―独奏ヴァイオリンのための(86、JFC出版)
- 愛についてI(基本形)(88)
- EVENING SHADOWS (タカシ) I―尺八と琴のための(89)
- 混声合唱曲「二つのからだ」(90)

日本音楽集団へ期待



小橋 稔

ところで日本人の表現は、そうしたことから他人の心を捉えることが最大の問題だったと言われています。

そうした表現の世界で日本の楽器も育ったものだと思います。そうした表現の楽器や音の中にはそうした日本人の心が染み込んでいく様に感じます。

それを現代の時点で捉え直すうとされている日本音楽集団の活躍には以前から深い関心を持っていました。

ところで日本音楽集団とは、個人的には作曲家の三木さんと昭和20年代岡山で、そして芸大の同級生として、またごく最近まではテニスの相手として付き

西洋では十九世紀の後半に至るまで表現とは神からの靈感を受けて、それを描き出すことだと考えられていたということですが、今日では日本人が古来から考えていた様に表現の根底は人間の心だということになって来ている様です。

合いをさせてもらっていました。
また笛の竹井さんなどには数年前スエーデン放送、文化庁、デンマーク放送などからの招聘で日本の伝統的な楽器を用いた古典と現代の作品の紹介、それに世界電子音楽祭など、スエーデンやデンマーク各地での演奏会でいろいろお世話になりました。

今年の会にも是非参加させて頂こうと考えていますが、多様な異文化の価値が尊重され共存することが重要なことと認識されて来た今日、日本音楽集團の活動には各方面からも一層の期待がかけられています。
そうしたことから益々の活躍と発展を心からお祈りしています。

また私も様々な可能性を作曲家の一人として挑戦させて頂ければ幸いです。

しかし日本音楽集團と私とが直接に接する機会は特に有りませんでした。
それが昨年、日本作曲家協議会と共催の演奏会を開くということを聞き、大きな期待を持って早速作曲したのが「火男」でした。

大変優れた演奏家の方々、それに最初はメンバーではなかった田村さんも加わって下さり素晴らしい演奏をしていただき大変感謝しています。

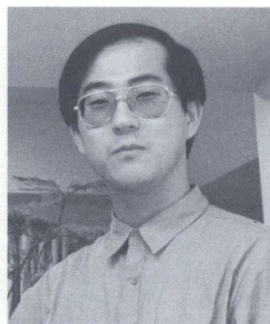
小橋 稔 略歴

昭和3年9月26日岡山生まれ。
昭和30年東京芸術大学卒業。
毎日音楽コンクール入賞、中西賞、TBS覚武井入賞など。
ISCMSストックホルムヘルシンキ、アテネ、入選。
元、玉川大学教授。
現、上越教育大学教授、日本作曲家協議会など会員。

主要作品

火男(ひよっこ)
さんご
雪の賦
月の賦
天声地響
しょうの楽
くんか楽
鬼女
阿吽 など。

「わかり易くてチャチじゃない、聴いていて満足感がある作品を」



川崎絵都夫

微かではあるけれど邦楽器への接点が出来たような気がしてとても嬉しかったのを覚えています。

大学時代に友人と聴きに行った日本音楽集團の演奏会で大いに感動し、邦楽器と邦楽器の機能を思う存分発揮させた新曲の数々は私の中に鋭い楔を打ち込んできました。しかし各邦楽器の機能も奏法も音域も何も知らず(箏だけは家で聴くことができたものの)その時受けたショックをどうすれば良いのかもわからず5年程経ちます。生まれて初めての委嘱を尺八の岩田恭彦氏から受け、尺八、箏、チェロの三重奏を書く事になり、ようやく邦楽器を勉強し始めました。(全くそれまで何をしていたのかと今にして思いますが...)その時に何回もの練習を通して奏法や記譜に関して多くを教わり、

さて邦楽器の作曲にあたっては、やはり各楽器の持つ圧倒的な存在感がどうしても世界を限定してしまう事も多いのですが、それを大切にしつつ今の時代のスタイルから影響を受ける、という事も試みて良い筈だと思っています。邦楽の世界がより広がりを持つ為には必要な事ではないかとの信念によるものです。(余談ですがビデオ版アニメ宇宙

皇太子の音楽の為に邦楽器5種類を使ったのもその実践です。多くの人が邦楽器の音色に馴染んで、あれっおもしろい！と言ってくれば...と思います)その上で私の作曲上の理想である、「わかり易くてチャチじゃない、聴いていて満足感がある」というような事を実現できるように願って頭を悩ませています。

川崎絵都夫 略歴

1959年東京生まれ。東京芸術大学音楽学部作曲科卒業。松村禎三・永富正之・国越健司の各氏に師事。日本作曲家協議会・日本音楽著作権協会各会員。
邦楽器の為の委嘱作品の他、室内楽、声楽(のはらうた)全18曲など。TV、CF音楽の作曲、東京交響楽団や坂本龍一のもとでオーケストラセッションも手がける。現在オペラの委嘱を受け作曲中。

邦楽器の為の主要作品

春霞の曲 薫風抄
秋霖の譜 哀歌
しろとみ 四季
風籟 尺八四重奏曲
鳴神のうた 涼暮の譜
他

私の邦楽作品に対する考え方



佐野芳光

作曲する上で、幼少年期の生活に密着した音楽は、その後にとっても影響力を及ぼすと思います。その点から見ると、私にとって邦楽という存在は、極めて縁の薄いものといえましょう。生まれ育ってからは、周囲には邦楽を弾き唄う方を、あまり見かけませんでしたし、テレビ、ラジオなどから流れる音楽も、ほとんどが、いわゆる洋楽であり、日本の伝統的音楽に、なつかしさを覚えるという経験は、あまり持ちませんでした。

学校などでも、同様であり、日本の伝統音楽といわれても、知識上は、三味線、尺八、箏などと答えても、感覚的には、あまり実感できないのが、正直なところですよ。

そのようなわけで、三味線という邦楽器を使用する場合も、これは、日本の代表的な楽器という思いはほとんどなく、パンジョーやマンドリンを扱かうような感覚で、作曲しているのが現実です。もともと私は、ギター(特にエレキ)を20年位弾いているためか、音楽のジャンルに対するこだわりは、とても少ないのです。そこで音楽を考えるとときは、アメリカの音楽であれ、アジア、アフリカの音楽であれ、地球上生まれ育った財産として、いつも見るために、邦楽も、そのひとつにすぎぬと思つてしまします。又、私自身は、あまり歴史的視点で、音楽をとらえたり、地域・民族性で理解しようとする、自由な立場で、演奏作曲出来なくなる気がするのです。

そこで、たとえばギターを目前にしてもスペイン伝統の民族楽器と見ることをしません、ギターは、単にギターとして、地球みんなの公的なものという思いで、いつも見てきました。もともと楽器は、それ自体、音を発する道具として、国籍も、

育ってきた過程も、白紙の状態で見えた方が、冷静にその特性を見つめられるような気がします。現在、政治も、世界全体の規模で、考えなければ進んでいけないように、音楽も、地球単位の中で、考え楽しんでいくことが、今後はとくに良いように思えるのです。

そして、常に若い世代を、巻き込んで、先へ先へ進むことが、音楽発展に不可欠であると思います。日本の伝統楽器が世界中に広まるためにも、若い世代の文化へ溶け込んでいなくては、発展は難しいものと思うのです。

佐野芳光 略歴

1955年5月28日東京生まれ。作曲を黒髪芳光氏、ギターを榎本滋郎氏に師事。

日本作曲家協議会会員。

主要作品

●エレクトリックギターとピアノのための協奏曲(Ⅰ-Ⅴ) (82、85)

●ポニージャックスLP「立山にうたう」(83)

●朗読とピアノ・児童合唱のための「ナ・スフレダノウ」(86)

●舞踏と10人の奏者のための「チャリーミンガス」(82) 他

言葉と音楽とがこんなにも密接な関係があるのに驚き…。13年間の西ドイツ生活を経て



西田由美子

私が初めて日本音楽にふれたのは、すでに物心ついた頃からでした。私の父が趣味で三味線と長唄を習っていたので、毎日その練習する音色を聞いて育ちました。又邦楽の演奏会や踊りの会もよく連れていってもらいました。そんな中で私自身はずっと西洋音楽を勉強し、その後13年間暮らした西ドイツの生活の中でも、作曲とピアノの仕事はずっと続けてきました。ドイツに暮らし始めて、4、5年たつと、言葉にも一応不自由はなくなり、風俗、習慣にも慣れ親しんできます。そんな時、ドイツ人の音楽表現が、上手下手を問わず、誰にも自然に息の長いフレーズで唄い、強弱が非常にオーバークラフ立体的であり、それをあたりまえにできるのは、ドイツ語の表現そのものであるような気がし、言葉と音楽とがこんなにも密接な関係があるのに驚きました。そして、私の作品は、それまでは、響きその物を中心に作曲され、西洋技法で勉強した作風でした。自分の母国語である日本語とか日本語的な目を向けるようになったのもその頃からです。日本音楽のテンプを聞き、能の本等を読み、インスピレーションを得ようとなりました。

そしてオーボエとピアノのための「舞楽」という作品を作り、これは、GEDOK国際コンクールで1位に入賞する事ができました。ヨーロッパで演奏可能な楽器という条件があったので、オーボエを使いましたが、私の内面には、邦楽器のテクニク

をもっと勉強して表現したいという考えが根底にありました。又、雅楽のような響きを出したくて、オーボエに和音を使ったり、幼い時から聞いた邦楽の世界のイメージを思い出しながら作曲しました。その後は、琴と尺八のイメージを追いながら、バイオリンとピアノのために、「はごろも」という作品をフライブルクの日本週間の音楽会で発表しました。今思えば、多くの作品が、無意識で、邦楽器（尺八、琴等）を思いながら書かれていたの気がつきません。ファゴットと室内楽のための「石庭」という作品も、（尺八、琴、篠笛）に置きかえる事ができます。昨

「造る」「演ずる」「聴く」の同化



山本直純

いつも思うことは、かつては

年、13年ぶりに日本に帰国し、邦楽の演奏会を聞きました。そして、深く心に納得するものがありました。今度は、すばらしい演奏者の方がたくさんいらっしゃる環境で、尺八と琴のために「化人」という作品を書きま

西田由美子 略歴・主要作品
山本直忠、長谷川良夫、P・シヨイモシユ、D・アツカー各氏に師事。東京芸術大学、ミュンヘン国立音大大学院卒業。
C・エツシエンバツハ指揮でオーケストラとピアノのための「星のきらめき」を西ドイツ諸都市で自作自演。ゲドック国際女流作曲家コンクールでオーボエとピアノのための「舞楽」が第一位入賞。

した。実際どんな音が響くのか、私の感じたままに鳴るのか、演奏していただけののをとでも、自分自身で楽しみにしています。

ヨーロッパ諸都市、南西ドイツ放送局で、バイオリン協奏曲、室内楽、ピアノ曲多数、録音および演奏される。最近、東京交響楽団において、バイオリンとオーケストラのための「夢のかたに」が本邦初演および再演された。
2台のピアノとオーケストラのための作品等がある。

ロパーに専業する人たちが出てきた。もっとも僕なんかのように時々指揮したり作曲したり、演奏と作曲の両方をやる人もいるけれど……。

そうするといろいろな約束事だとかシグナル、符牒があるとか、例えばクレッシェンド、デクレッシェンドとかフォルテ、ピアノとか意思疎通をはかるために、また必要な条件を満たすためにさらに研究を重ねたり、さらに細分化されたりしていくわけで、このように大変面倒に

してしまつたことで、本来もっているべき「音楽の心」とか「精神」が伝わらないで終つてしまふことが多くなつたと思う。

日本音楽集団と僕とは初期のころから縁があった。邦楽作品という形では残していないけれど、たとえば「青年の樹」(TBSのTV)とか劇伴に東京尺八三重奏団(日本音楽集団の前身で村岡実、横山勝也、宮田耕八朗氏がメンバー)や箏、三味線鼓の方たちをしょっちゅう頼んでいたの、邦楽器というものをごく自然に受けとめていた。そういう点では三木さんよりは早かつたかも知れない。

日本音楽集団の長年の活動においては、楽譜と音というもの、さらに作曲家の精神と演奏家のもっているセンスとか精神というものを同化させ、聴く人を感じさせ、楽しませてこられたことに心から敬意を表したいと思っています。この「造る」「演ずる」「聴く」という三つのジャンルを一つの場合で行う中から素晴らしい音楽の花が咲き、いずれそれが更に大きな実となるように活動を続けて頂きたいと思っています。そしてまた私が何かの縁でお役にたてる事があれば光栄だと思います。

山本直純 略歴と主要作品

1932年東京生まれ。亡父直忠氏より幼少の頃から音楽教育を受く。自由学園から東京芸術大学作曲科へ入学。後指揮科へ転科。渡辺暁雄氏に師事。58年卒業と同時に作曲の方へ進む。すぐさまテレビ、ラジオ、映画などの各分野でその才能を発揮し、活躍の場を広げている。
TV番組「オーケストラがやって来た」で10年間にわたって音楽監督を務め、そのユニークな企画とウィットに富んだ解説で好評を博した。
1974年10月24日、ニューヨーク国連デーコンサートのための国連委嘱作品「人」を作曲、日本太鼓とオーケストラの組合せによるこの曲は、パリ、ロンドン、ドイツ各地でも引き続き演奏され、熱狂的な聴衆の拍手で作曲者は何度もステージに呼び出された。
1979年7月、1980年と日本人として初めてポストン・ポッツを指揮、当夜はジャパン・ナイトとタイトルされ、日本のアーティスト・フィドラー、と呼ばれた。(社)日本作曲家協議会理事。
作品、合唱組曲「田園わが愛」ほか多数。

紫綬褒章を受けた長沢勝俊

日本音楽集団の創立メンバーであり、団の代表として常に音楽集団を支えてきた長沢勝俊氏が、このほど紫綬褒章を受章されました。去る五月十六日、如水会館にて伝達式が行なわれましたが、以下は、その受賞理由ともなる「褒章の記」です。

多年作曲家として多くの優れた作品を発表してよく音楽界の発展に寄与し業績まことに著名であるによって褒章条令により紫綬褒章を賜わって表彰せられた。

長沢氏は、受賞決定後に開かれた四月の音楽集団の総会の折にも、「この受賞は音楽集団のこれまでの活動が認められたというものである」と述べられました。

だが、何といても御自身の温かい人間性のにじみでるその曲が、音楽集団の魅力の大きな一つであつたといえるでしょう。その長沢氏よろこびの言葉と各界の方々からのお祝いの言葉です。

長沢勝俊氏 談

四十年以上にわたる様々な作曲活動と、二十五年間にわたり日本音楽集団の仲間と共にやってきた現代邦楽の仕事が評価されたものと、大変うれしく思っています。日本の音とその表現を求める課題の中でめぐり合った多くの人達との交流、そして聴衆との出会い、これらを大切に作曲活動を続けてゆくつもりです。



吉川英史氏（評論家）談

長沢勝俊さんのことではまず思
い浮かべるのは、日本音楽集団
の代表としての姿です。三木稔
さんが去られた後も立派に音楽
集団を守り抜いておられること
には深く敬意を表します。

それと共に作曲家としての長
沢さんをみると、単に西洋音楽
に日本の楽器をあてはめるので
はなく、みごとに消化して日本
的な音楽を作りあげていること
に共感を覚えます。現代邦楽の
中にはヨーロッパの現代音楽に
類似しているものもありますが、
氏の作風はそれとは異るところ
が私は気に入っており、私自身
も楽しませてもらっています。

また、全国小中学校箏曲コン
クールでいつも御一緒にいる
審査員仲間としても、親しみを
覚える方です。

今後の一層の御活躍を祈りま
す。

宗像和氏（作曲家）談

長沢さんとは古いつき合いで
す。（まじめな方なので普段音楽
会で会う程度ですが。）クラシッ
クの作曲を地味にやっている人
には日の当たらない場合が多い
ので、今回紫綬褒章を受章され
たことは大変うれしく思います。
また、長い間日本音楽集団を
率いて活動を続けているという
いわば一つの道を貫いておられ
ることは、立派なことだと思
います。なかなか貫けないもの
です。

長沢さんの音楽は、いわゆる
現代音楽とは道が違いますが、
氏は音楽の基本を忘れず、いつ
も音楽の原点を離れないで歩
いているので立派です。逆にな
らば、長沢さんの音楽には他の作
曲家にはかけない温かさがあり
ます。氏の音楽が邦楽界のみな
らず一般の音楽愛好家にも広く
愛される所以（ゆえ）です。今回の受章
は妥当なことと思います。
おめでとうございます。

戸井昌造氏（画家）談

私にとって、得がたき友であ
る長沢君の今回の榮譽を、僭越
ですが、私なりに理由づけたい
と思います。

その一 長沢君は戦争に生き
残った人間として、基本に据え
るべきヒューマニズムを持ち続
け、それに裏打ちされた創造活
動を貫き、音楽家として決して
墮落しなかつた。

その二 個性の強い人達の連
合体である日本音楽集団をまと
めていくというむずかしい仕事
——それは必ずしも彼の性に合
っているとは思えない——をや
り通して、アンサンブルの力を
高め、運動体としての価値を深
めた。

以上の二点だけでも、長沢君
はわれわれの側からする榮譽を
負うべき人だと思えます。
がんばり通して下さい。

三木稔氏（作曲家）談

受賞おめでとうございます。
長沢さんは、何らかの形で個人
の賞を受けられて当然だと思い
続けてきました。長い間わずら
わしい立場にいつづけて、本当
に御苦労様でした。もと集団に
いた人間として、現在の状況を
大変心配しています。健康に気
をつけられて、大変でしょうが
これからの集団を力強くリード
していつて下さい。

皆様御多忙中のところ、お電
話でお願いしたのですが、ど
なたも快く御承諾下さいました。
ありがとうございます。

音楽集団が今後どのような活
動をしていくか、多様な社会に
対応していかねければならない
のでそれは大変なことだと思
いますが、長沢氏にはいつまでも
その中枢にいて頂いて、お元氣
で作曲を続けて頂きたいと団員
一同も願っております。

おめでとうございました。

（取材・宮越圭子）

うらぶらぶる・うらぶらぶる・うらぶらぶる《ズバリ発言!》

池田 逸子

「初心を失わずに」とか「初心に立ちかえって」などと、よく言う。当初の意気込みを常に忘れぬ謙虚さを持つという訓戒だが、十年、二十年、あるいはそれ以上も当初の意気込みを持ち続けるなんてことは、たいへんむずかしい。個人でもそうだし、ましてやグループや集団となるとメンバーの交替や年齢・考え方との違いその他いろいろな変化や条件が加わるから、なおさら並大抵のことではない。だから当初の意気込みが必要だ（意気込みは「息込み」である）。新鮮なエネルギーを送り込まない、「初心」は、たちまち萎れるであらう。その新鮮なエネルギーを生み出す源は、もちろん、創造的な好奇心、失敗を恐れぬ冒険心を措いて他にはない。すでに四半世紀の歴史を刻んだ日本音楽集団の最近の活動について、あ

ただくならば、この創造的な好奇心、失敗を恐れぬ冒険心が欠けてきているのではないだろうか。

第百回記念定期演奏会に寄せたメッセージで、思いつくままに、①新作委嘱をもっと活発に、②声の分野での問題提起を、③邦楽、洋楽を問わず他グループからのゲスト招聘、または提携公演（他流試合のススメ）と提言したが、以下にこれらと関連して日頃感じている疑問などを書いてみたい。

日本音楽集団（以下、〈集団〉と記す）がかつて輝いていたのは、日本の現代音楽の一ジャンルとしての現代邦楽——その創造活動の先頭に立っていたからである。だが活動の過程で大衆性の獲得（普及）が大義名文となり、創造性の追求が切り捨てられてしまった。そして切り捨てられた方は、団員の個別的な

追求課題（リサイクルなどでの）となってしまう。もとより大衆性と創造性の両方を追求することは容易ではないが、決して相矛盾する課題ではない。むしろ創造性の支持を欠いた大衆性には発展の余地がなく、そのことのツケが、今日の〈集団〉にきているのではないか。

〈集団〉には常に創造的な活動を期待したい。わずか二十六年で守りの姿勢をとるのは早計だ。新作委嘱を活発に、と提言したのは以上のような考えからである。もちろん委嘱は、従来の行きがかりや先入観などから判断したりせず、現代日本の作曲界全体を視野に入れた総合的かつ創造的な展望にもとづいて行ってほしい。資金の問題は大きい。それを理由に創造的な活動を放棄するわけにはいかないだろう。たとえば、東京混声合唱団がとっている「作曲委嘱活動



「支持会」などは参考にならないだろう。あるいは「新典音楽協会」との連携などは考えられないのか。

さらに、創造性は演奏においても十分に追求し、発揮してほしい。刺激に富んだ新鮮な演奏なくして、いかなるすぐれた作品も創造性を発揮しえないし、作曲家の創造意欲もそそらない。

「集団」の演奏では、各人の個性を抑えて得られる単にきれいな合奏ではなく、むしろ日本の楽器の特色を生かし、各人の個性を積極的に発揮して得られる合奏の魅力をぜひ追求してもらいたいと考えている。ところで、旧作の再演は頻繁だが、最近作の再演が少ないようだ。玉も磨かなければ光らないし、石であつたとしても問題が明確に見えてこないのではないか。再演ではさらに創造性を発揮して。たとえば指揮者を替えてみるなど。

演奏者が替わることによって曲の印象がガラリと変わり、取っつきにくかった曲が急にそうではなくなるなんてことがある。他の演奏グループとの交流が、列車の相互乗入れのようにもつと頻繁にステージで実現したら、

どんなに面白だろう。もちろんそれぞれの委嘱作品やレパートリーなども交換して、創意溢れる演奏をどんどん競い合ってもらいたいものだ。そういった各グループの、現段階での流派をこえた開かれた交流から創造上の新しい展望が得られる可能性は大いにあるのではないか。

たとえば、以前から声や三味線の作品をよく追求している谷珠美邦楽研究グループとの交流、あるいは沢井合奏団との協演等々、不可能なことであろうか。

谷珠美氏自身、かつては長沢作品でゲスト出演したこともあり、他にも個人レベルや国立劇場の企画などではすでにいくつかの前例もあることだし、決して机上の空論ではないと思う。

まだ大いに開拓の余地を残している楽器についても、演奏者の個性と意欲とを生かすかたちで「集団」の中で追求できないか。合奏形態も現状の編成にこだわらずに、もっと自由かつ多様であってもいいのではないか。

あるいは、団員演奏家が作曲した作品の特集コンサートやジャズ・プレイヤーとのステージなども試みられているが、思いつ

きで、やり散らかしているような企画が多くないか、などなど疑問は尽きないが、ひとまずこの辺で留めることにする。

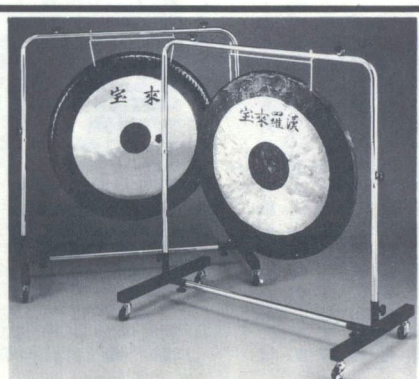
「さじかる・しりーず」ズバリ発言！という頁を今度から設けるのでと言われて、そのトップ・バッターを引受けたわけだが、このような発言は、請われた場合であっても言い放しになることが多くて気が重く、ただでさえ遅い筆がいつそう遅々として進まず、まったく往生してしまつた。「集団」に大いに期待するところがあるからこそ、あえて書き記した筆者の真意をぜひ汲んでいただきたい。むろん、この発言にたいして団員の誰かから、ましてや代表として、解答されるなどということは、まったく望んでいない。望むとしたら、全団員によるケンケンガクガクの論議であり、団員ひとりひとりの思考である。この発言が少しでも、言葉の真の意味で「ラジカル」(根本的)徹底的(過激な)な討論の材料になるならば幸いである。もちろん解答は、「集団」の今後のステージを通じて聴かせてもらおうと思

っている。

この一瞬にこの雄大を!

宝来・宝来羅漢

中国長年の歴史から生まれたゴングの一級品……宝来羅漢。20年の技術の結集とクラフトマンシップから生まれた国産唯一のゴング……宝来。ここに品質、デザインも変わり新たに登場。どちらも、その音色は濃厚でクリエティブな響きを持ち、クラシック・ロックなど幅広いサウンドにマッチします。



中国長年の歴史から生まれたゴングの一級品……宝来羅漢。20年の技術の結集とクラフトマンシップから生まれた国産唯一のゴング……宝来。ここに品質、デザインも変わり新たに登場。どちらも、その音色は濃厚でクリエティブな響きを持ち、クラシック・ロックなど幅広いサウンドにマッチします。

この一瞬にこの雄大を!
宝来・宝来羅漢

宝 来		宝来羅漢 (中国製)	
サイズ	品番 価格	品番 価格	品番 価格
32" (81cm)	G-32 ¥118,000	GR-32	¥144,000
36" (91cm)	G-36 ¥168,000	GR-36	¥217,000
40" (101cm)	G-40 ¥220,000	GR-40	¥325,000

スタンド		
サイズ	品番 価格	品番 価格
32" (81cm)	GS-32 ¥30,000	GM-10 (ラージ) ¥4,500
36" (91cm)	GS-40 ¥35,000	GM-11 (スモール) ¥4,500
40" (101cm)	GS-40 ¥35,000	トレモロ ¥4,500

※宝来ゴングは、22" (56cm) より製造しています。別途カタログをご参考下さい。

(定価に消費税は含まれておりません)

株式会社 アイダ楽器 千131 東京都墨田区押上2-42-1 ☎03-614-4115

●カタログ希望の方は200円切手を同封して住所、氏名、年齢、電話番号を明記の上、お願いします。

第114回定期演奏会

プログラム

作曲家の個展①——新実徳英氏をむかえて

一、青おうの島しま

新実徳英 作曲

- 〔箏 I〕 吉村 七重・久東 寿子
〔箏 II〕 内藤 洋子・大島 菜穂子

二、幽寂ゆうじやくの舞

新実徳英 作曲

- 〔尺八〕 米澤 浩
〔胡弓〕 畦地 慶司
〔三味線〕 工藤 哲子

曲目について

1976年に〈纏〉(後に日本音楽集団作曲受賞)、1977年に〈アンラサージュイン〉(混声合唱とオーケストラのために) (同年ジュネーブ国際バレエ音楽作曲コンクール・グランプリ受賞) を出発点としてその後現在に至るまで、音の纏りつき(「アンラサージュ」は仏語で纏りつきの意)が私の作曲のテーマであり続けた。〈アンラサージュ〉は第四番まであり、それらはいずれも音の純粹運動に着目したものであったが、この数年はそういった音の運動はアジア的宇宙観音楽観と結びつき、新たな展開を拓きつつあると自分では考えている。〈横響〉、〈淡海〉、〈風韻II〉、〈風音〉、〈南の島〉等がそういった流れの中で作られたもので、今回初演の〈風を聴く〉にしながら、更に現在作曲中の管弦楽曲〈遠音〉(仮題)へと展開していく。日本を含むアジアの旋法旋律法の抽象化、グリッサンドを含む揺れ動く線の纏りつき等を音楽材の中心としアジア的宇宙観を表出しようとするものである。以下、本日演奏される3曲について簡略に記すことにする。

〈青の島〉(1989年6月、吉村七重・内藤洋子委嘱作品) は二面の二十絃箏のための作品。本日は四人で演奏される。もともと二人以上何人でも(2×n)演奏され得る曲として発想されており、いわばn通りのヴァージョンが存在することになる。今回はその意味ではn=2のヴァージョンの初演ということになり、二面で演奏されたのとどのように異なる様相を呈するのか興味深い。「青の島」とは沖縄古来の信仰で祖霊の眠るころ、靈魂の召されていくところと考えられている島である。

〈幽寂の舞〉(1986年6月、国立劇場委嘱作品) は尺八、胡弓、三絃、三面の箏、一面の十七絃箏のための作品。このタイトルにふさわしい架空の舞を想定して作られたものだが、その後現実に花柳昌三郎さんの日本舞踊公演に使われ、作曲家としては不思議な体験であった。陰旋法を中心とし、楽器群は線・点の様々な纏りつきを展開する。

三、風を聴く（委嘱初演）

新実徳英 作曲

- 〔箏 I〕 宮越 圭子
- 〔箏 II〕 大畠菜穂子
- 〔箏 III〕 久東 寿子
- 〔十七絃〕 島崎 春美

〔笛〕 竹井 誠・西原 貴子

〔尺八〕 三橋 貴風・水川 寿也・添川 浩史

〔箏 I〕 吉村 七重

〔箏 II〕 内藤 洋子

〔箏 III〕 大畠菜穂子

〔十七絃〕 宮越 圭子

〔指揮〕 新実徳英

四、霜夜の砧

柴田南雄 作曲

〔尺八独奏〕 三橋 貴風

〔風を聴く〕は今回初演の日本音楽集団委嘱作品。尺八篠笛群による線の纏りつき、箏群による点の纏りつきを中心に、微細な音の揺れ動く様を凝視する。

日本の現代音楽の展開に少なからぬ役割を果たすに違いないこのシリーズの企画に大いに敬意を表するとともに、その第一回の作曲家として選んで下さったことに榮譽と責任を感じるものである。意義深いコンサートにしたいと願っている。
(新実徳英)

題名の「霜夜の砧」ですが、字義としては申すまでもなく簡明であり、晩秋から冬にかけての寒夜に、古来の東洋の秋の風物詩である砧の音の響くのをあらわしております。ただし、「砧」から連想される中国の故事へ遠い故郷にある妻の打つ砧の音が、幽閉の身の蘇武の耳に届いたこと、や能楽の筋へ九州芦屋の某が訴訟のため在京久しく、妻は空しく砧を打って帰国を待つとは、直接の関係はありません。では間接的には関連があるのか、と問われれば、中国の故事については、秋から冬にかけての乾燥した大気が、夜の静寂の中では砧の音を遥かの

五、

彫板えりいた

(改訂初演)

——生きている版本——

長沢勝俊 作曲

〔笛〕 竹井 誠

〔尺八〕 米澤 浩・水川 寿也・水谷 雅康

〔胡弓〕 畦地 慶司

〔三味線〕 野口美恵子・田中悠美子

〔琵琶〕 半田 淳子

彼方にまで運ぶという事実が一種のテレパシーに置きかえられていると思うので、わたくしの曲も、現に演奏されている会場の中だけでなく、過去の、未来の、遠い所の人の耳に達することを願う気持で、この言葉を選びました。また、能楽の場合は、碁を打つ単調なリズムが生命の脈動を刺激し、感情の鼓動を昂揚させて一種のトランスに達せしめ、そのまま回復しない状況を描いている訳で、パルスと生命の深いかわりを暗示しているこの言葉に惹かれた、と申せましょう。なお、申すまでもなく、その他の箏曲や三味線音楽で碁の題名を有する楽曲とは、上記以外の関係はありません。要するに、わたくしの曲において「碁」は広い意味でのパルス、リズム、脈拍、呼吸をあらわしております。「霜夜」は現実に冬の寒気厳しい夜であり、同時にそれは人生の冬の、しかも春がめぐって来るのではない、最後の冬の厳しさをあらわしております。 柴田南雄（初演時プログラムより）

この作品は私自身の第一回目のリサイタルの折に柴田南雄先生に委嘱したのですが、現在ではこの曲に臨む時、普化尺八の古典本曲を吹奏するのに等しい精神状態を持ち演奏をしていると感じています。自分の内部に於いてはこれは既に名実共に現代の尺八本曲として位置していると思っております。 (三橋貴風)

彫板とは浮世絵版画に使う版本のことである。何枚かの版本を媒体として、絵師と彫師(ほりし)と摺師(すりし)とがたがいに技をみがきあい、自らの工夫をかさねつくり上げていった浮世絵版画。それは幕末から明治初期にかけて世界各国より多くの注目をあびてきた日本独自の美術作品であり、そこには現代の印刷物とは一味ちがった生き生きとした手づくりの味がある。

この版画の制作に不可欠な版本の素材は、主として桜の板目が使われており、特にシオボクと呼ばれる海岸沿いの、浜風に吹かれた桜が最良といわれてきた。

このような版本に彫られた版画は、二百年近くたった現在でも当時の版画家達の技に徹した息吹に満ちあふれている。

版本を媒体としてつくられた繊細にして豪快華麗な美の世界。ここ数年にわたり私はこの美の世界と版画家達

八尺銘山箏

琴古、都山各寸美麗仕上
特製品燦竹も各寸揃います。

山 箏 村 木

〒379-16 群馬県利根郡水上町谷川437

TEL.0278-72-4108

琴・三絃の製造・修理・販売!



竜勝堂

ローン御利用下さい

毎月第一土曜日はサービスの日。御来店のお客様に
限り1割5分お引致します。(琴・三絃のみ)

営業時間 午前9:30~午後6:30 定休日(日曜日)
土曜日 午後7:30迄
松戸市大谷口外番場345-7

☎ (0473) **45-5807**
作業所 (0471) **63-3864**

日本音楽集団の 海外公演をお世話 しております。



郵船航空サービス株式会社

渋谷旅客営業部

〒150 東京都渋谷区道玄坂1-13-5

鈴木本館ビル2階

電話(03)780-2082

団体科: 佐藤/木下/熊谷

〔十三絃箏〕 内藤 洋子・佐藤 里美
 〔二十絃箏〕 吉村 七重・久東 寿子
 〔十七絃〕 宮越 圭子・島崎 春美
 〔打楽器〕 尾崎 太一・望月 太喜之丞
 〔指揮〕 田村 拓男

の生きざまをおいつづけてきた。浮世絵版画の世界は幅
 が広く底が深い。
 今回の改訂にあたっては、全体の骨組をよりダイナミ
 ックなものとし、各楽器の特色をより鮮明に活かしなが
 ら、色彩感ゆたかなものとして再構成した。(長沢勝俊)

日本音楽集団の演奏会から

第112回定期演奏会

笛・打楽器特集Ⅱ

2月5日(月)バリオホール

富樫 康

日本音楽集団第112回定期はト
ーキングドラムの阿達彰義とマ
リンバの安倍圭子をゲストに迎
え、笛と打楽器の特集としてプ
ログラムを飾った。

最初、秋岸寛久作曲《撃攘歌》
は始め皮質打楽器と木質打楽器
〔黒坂昇、前田文男、細谷一郎、
高橋明邦〕のランダムな交錯が
異和感なく行われ、横笛〔西川
浩平〕が入ってからも過激に走
ることなく、適度な落着きのも
とに、手綱を引締めながら行わ
れる。伝統と現代とのバランス
が、理性を失わずに調和されて
いる点を買われるが、反面、も
少し手綱を緩めてもよいとの観
もする。三木稔の《擣》は打楽
器二人〔望月太喜之丞、細谷一
郎〕であるが、この場合は、伝

統からの脱却が、かなり自由な
立場から行われ、自己主張が明
確に感じられる。小品ながらも
とまっている。(これは《四群の
ための形象》の第四曲)

トーキングドラム阿達彰義が
作曲、出演した《FOREVER
ELEPHANTS》(委嘱初演。笛
・藤崎、竹井、打楽器は他に6
人)は、打楽器が順繰りに交替
演奏するのが、余りにも約束さ
れた規律正しさの為に、楽曲を
固形化させた嫌いがある。だが
その中にも細やかな演奏上のニ
ュアンスの変化が、固苦しさを
救っている。長沢勝俊の《風流
変容》(初演、笛・望月太八、打
楽器・尾崎太一、望月太喜之丞、
堅田啓輝)は子どもにも理解で
きる童話で話すような語り口で

綴られている平易性がある。音
色上のバラエティも華麗で美し
く、好感がもてる。和太鼓の楽
しさと、横笛の楽しさを両立さ
せたものといえよう。最終曲、
三木稔の《マリンバ・スピリチ
ユアル》(安倍圭子、打楽器・尾
崎、高橋、堅田)は現代マリン
バ曲としては緩やかな進行のな
か、暖かく心を包みながらの導
入部。そして日本の大太鼓が参
加するとアレグロになり中心部
が来る。更に小太鼓も加って祭
典的な気分が盛り上がる。マリン
バと祭りといった、余り例を見
ない取り合せだが悪くない。

日本音楽集団の第113回定期は
「三味線・琵琶・胡弓・抱える
楽器の面白さ」というサブタイ
トルが付いている。胡弓に「抱
える」という表現はどうかと
いう意見も聞こえたが、腕から
人の体の暖かみが楽器に伝わる
という意味では共通点があろう。
そのような点に注目すると、今
回の定期は、各楽器の「邦楽器」
としての体温を追求した側面が
大きいと考えられる。集団には
現在多様な志向性が生きている
と思われるが、これは或る意味
で邦楽器の「故郷」を演奏家の
「胸」に求めている動きだとも言
えよう。

三味線・琵琶・胡弓、抱える楽器のおもしろさ

長尾一雄

第113回定期演奏会

4月26日(木)バリオホール

が半田淳子のために書いた「夜
の炎」である。畦地の曲は自作
であるから、その胡弓の演奏は
自然でのびやかで、音楽が個人
の体質を聞き手に伝えるもので
あるとすれば、魅力ある個性が
そのまま伝わって来るこの楽し
さこそ音楽といふべきであらう。
畦地には独自の「間」の感覚が
あるが、これは三味線で共演し
た野口美恵子の、しゃっきりと
した「間」と合わせると、かな
り音楽的に生き生きとした表現
になるのだった。

「夜の炎」は、琵琶の半田淳子
の個性に、作曲者の牧野が触発
されて書いたものと思われ、こ
こにも演奏者の肉声ともいっ
べきものが聞かれる。声のない器

楽であるが、そこに半田独自の琵琶歌の、ゆたかなふくらみが感じられる。ここでも内藤洋子の箏が半田の世界に切り込んで立体感を増している。

最初に演奏された杵屋正邦の「明鏡」と、休憩後の本間貞史曲「九絃の曲」にはそれぞれ問題がある。「明鏡」は、集団としては珍しく、古典長唄から出発した作曲家の代表作を演奏したのであるが、工藤哲子と水川寿也の三味線と尺八は、現代邦楽の水準としてすぐれた音楽性をあらわしている反面、作曲家の身につけている伝統邦楽の「間」が、必ずしも十全には生きなかったように思われる。

「九絃の曲」は、作曲家がいわゆる邦楽のイデオムを意識しすぎたために、かえって「間」の面白さを出しきれなかったのではないかと思う。太棹坂井敏子、中棹花房はるえ、細棹太田幸子、それぞれこの曲によって鳴りながら、なお今ひとつもの足りなかった。その点最後の長沢勝俊曲「日本楽器による幻想曲」は、洋楽のイデオムのうち「間」が生きて、田原順子の琵琶がよく鳴っていた。

第18次海外公演

台湾公演報告

田中悠美子

一行二十二名とジャパンアーツのマライヤ・スコットさんが台北の空港に着いたのは、四月十五日昼過ぎ。成田を発って約三時間のことで、国内旅行のような気軽さ。出迎えてくれたアジアムジカのリリさん、空港に降り立つ現地の人々の姿形にも中国本土のそれよりずっと親近感を覚える。

雨模様の中、幌もないトラックの荷台に積まれた楽器を気にかけてながら、バスで市中心部に移動。五ツ星ホテル国賓大飯店にチェックインの後休憩。筆者は数名と連れ立って、ロータリーいっぱい食堂が軒を連らねる「圓環」に向き、香辛料が効いた屋台料理をはしご。夕方には演奏会場の国家音楽廳を下見。二十五万㎡の敷地の中、蒋介石の偉業を称える中正紀念堂前方に、国家戯劇院と向い合って建つ中国宮殿式の豪華な建物で、内部は二千席を備える最新式のホールである。

夜八時頃から、国際会議場のような雰囲気の出派な円卓を囲んで「中日音楽家対話」(セミナー)が行われる。台湾側は、台北市立国楽団の団長、国家劇院の顧問をはじめ、国楽系の作曲家、演奏家の諸氏、対するは集団のメンバーで作曲家が同席しておらず、お互いに相手の演奏を聴いていないうちのことでもあり、いま一つ具体的につつこ

んだ話にならない。(我々にはインテレクトチュアルが必要だ!)それでも二時間ほどの間に、両国の伝統音楽や伝統楽器による音楽が似たような状況に置かれており、同じような問題を抱えていることが確認され、今後一年一回は交流が行われることが望ましいという結論に達した。(日本、韓国、中国などアジア各国の真の意味での音楽交流が行われればなあ)それにしても、音楽大学の中で、洋楽科の学生は国楽必修というこの羨むべき事実!

翌十六日午前中は自由行動、二時からリハーサル。本当に大きいホールで、食堂を捜すのに迷路のような館内を三十分程ウロウロして皆大騒ぎだった。

七時半より本番。客足はまあまあ(二千席!)だったが、前日のセミナーの影響もあったか、皆興味津々で聴いてくれているのが手にとるように伝わってきた。

で、メンバーも大張り切り。後味のよい演奏となった。プログラムは新八千代獅子、那須与一、ファンタスマゴリア、秋の曲、巨火といつものレパートリー。十年前の海外公演のプロトタイプと違っていいことを、翌日帰途のバス中で耳にした筆者は不思議な気持ちになってしまった。



国家音楽廳の会議場で行なわれた中日音楽家の討論会

現代日本音楽の夕べⅡ

三木稔の世界

東京交響楽団特別演奏会

3月29日(木)・サントリーホール

上野 晃

このところ三木稔の個展が、いくつか催されている。しかし今度の、東京交響楽団の現代日本音楽シリーズにおけるオーケストラ作品三曲による「三木稔の世界」は、この作曲家のマルチプルな領域とポリテイカルな創造基盤を一層広大に現出させて見せた。室内楽作品による個展でもそうだが、オーケストラ作品でとなれば、選曲には大変難儀があったことだろう。二十

曲近いオーケストラ・ワークスは、融通がつかず同時に、相当な決断も迫られる。三木の場合、すこぶる協奏曲的作品が多い。実質的に交響曲と見られるシンフォニックな作品でも、協奏ふうな形態をとることがほとんどだが、そこに特定のソリストないしは楽器群がイメージされ、楽案の中心となっている。結果的に今回のプログラムは、彼の初期の作風に繋がる全体、そこから初演の最新作に懸かるアー

チ、その彼方にさまざまな「東」と「西」のアスペクトを望みさせた。

部から北京周辺の大衆歌の断片やそれらの独特なポルタメントを織り込んだ旋律、あるいは中国の楽器の固有なトーンも用いて、中国民衆とその風土をテクステュアに摺る。加えて滾るような忿怒のクラスターが悲劇を追認していく。中間部のピツィカートによる運びが印象的。濃淡きついサウンドが情景を区切るけれども、遠近感やヴェクトルの弱いのが意外だった。

二十七年来の「レクイエム」は、バリトン独唱と男声合唱の音楽曲としては、太書きのしっかりとした書法で作られている。初演時の諸々の事由で、管楽器と打楽器が主力のオーケストラになってしまったらしい。が、折角弦楽器群を除外した編成の特徴的な音色構図や室内乐的デ

イストリビューションが聴かれない。勝部太と東京リダーターイーフェルの深い歌唱と豊かなサウンドイング、しかしそれと器楽とが掛け違ってしまうのを惜しむ。

「急の曲」は、三部作《鳳凰三連》の終曲にあたるが、ゲヴァントハウス二百年祭記念委嘱作として書かれ、同オーケストラと日本音楽集團の邦楽器群によって一九八一年にライプツィヒで初演。バッハ(BACH)の音名と三木稔特有の陰階テトラコルド(DESg)を繋ぐ音列に東西世界の融和を象徴するこのミニメンタルな作品は、今度も、というより

今回は、格段に練達の日本音楽集團の絶妙なアンサンブルと三管編成オーケストラの周密な演奏との屈託ない総合によって、素晴らしいトータルを達成した。小林研一郎指揮、東響の充実度も特筆に価する。

「音楽芸術」6月号(音楽の友社)より転載

「急の曲」を演奏する日本音楽集團と東京交響楽団指揮：小林研一郎

拍手に応える三木稔

昨年六月の天安門の惨劇にちようど居合わせた衝撃、その憤りと数千の犠牲者たちへのレクイエムとして書かれた《北京禱歌》は、弦楽オーケストラによる一種のコンチェルト・グロッソのような形をしている。東北

「急の曲」は、三部作《鳳凰三連》の終曲にあたるが、ゲヴァントハウス二百年祭記念委嘱作として書かれ、同オーケストラと日本音楽集團の邦楽器群によって一九八一年にライプツィヒで初演。バッハ(BACH)の音名と三木稔特有の陰階テトラコルド(DESg)を繋ぐ音列に東西世界の融和を象徴するこのミニメンタルな作品は、今度も、というより

今回は、格段に練達の日本音楽集團の絶妙なアンサンブルと三管編成オーケストラの周密な演奏との屈託ない総合によって、素晴らしいトータルを達成した。小林研一郎指揮、東響の充実度も特筆に価する。



拍手に応える三木稔

「急の曲」を演奏する日本音楽集團と東京交響楽団指揮：小林研一郎

(写真・木之下 晃)

小さな空間 大きな出会い

工藤哲子

〈聴衆と演奏者の広場〉

ほぼ毎月、原宿のアコスタディオで行われている日本音楽集団のサロンコンサート、回を重ねて四月で三十三回目となった。このコンサートは、大編成の曲が中心で大きな会場で行なわれる定期演奏会では難しい聴衆の方と演奏者との交流を図ることを目的のひとつとして、後援会であるニッポニアメイツとの共催で生まれた。

〈みんなで創ろう〉

画期的なことは、いつもは客席で聴いてくださる方にコンサートの企画に参加していただいたこと。当初は、毎回、ニッポニアメイツの有志と音楽集団団員とで実行委員会を持ち、前回の報告と次回の企画を進めていた。

たとえばコンサートの中で、一般には馴染みのうすい邦楽の譜面の紹介、それを使ってお客様にも参加していただく邦楽教室、楽器に触っていただく体験コーナーが生まれ、これは、お

客様から、より邦楽器が身近で興味あるものに感じられたというご感想を頂戴した。

休憩には、次回出演者による次のコンサートの紹介と、チケットの当たるジャンケンコーナーがあり、これは、演奏中の緊張感をときほぐし、後半をより密度の濃い音空間にさせていた。そして、コンサート終了後、その場で、交流会が和やかにひらかれていた。



交流会より

最近、集団メンバーがサロンコンサートの団員側の窓口企画を持ち込み、年間のスケジュールが決められるようになり、お客様からの御意見は、会場で

のアンケートや出演者に寄せていただくようになった。

〈広げよう、みんなの輪〉

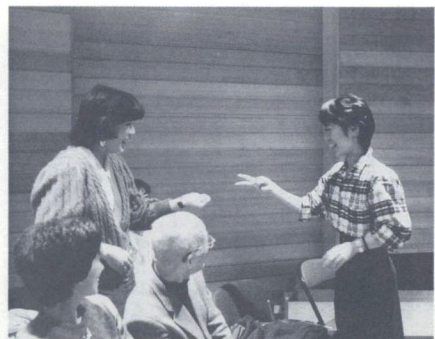
少しずつ形を変えているサロンコンサートだが、お客様からの聴きたい音楽、演奏者からの演奏したい音楽の意見がぶつかり合い、融合することで、新しい曲やコンサートのスタイルが生まれ、熱気あふれる音の空間がつくられている。これは、これからの邦楽を支える大きなエネルギーとなると予想される。

これからも、音楽集団は現代に生きる邦楽、皆様に愛される音づくりをしていきたいと思えます。どうぞ御来場いただきコンサートづくりに御参加いただけます様、そして御意見をお寄せいただきます様御願い申し上げます。

この「小さな空間 大きな出会い」では、サロンコンサートだけではなく、広く皆様の御意見を發表させていただく場として参りたいと存じます。



楽器に触れる体験コーナー



ジャンケンコーナー(上) 実行委員会(下)

現代邦楽事情 — その7 —

邦楽ジャーナル編集長

田中隆文

「ライブに注目」

— その6 — から半年、この間に筆者の注意を最も引いた出来事と言うとするなら、ライブ小屋自身の主催による邦楽ライブが、同時に数ヶ所で、毎月定期的に始まったということだ。世間を騒がせた(財)邦楽普及振興協会の手形濫発事件などもあるが、今回はこのライブに焦点をしばって話を進めてみたい。

ライブの収客力は小さく、個々をとってみれば小さな出来事かもしれないが、総じてみれば常に新しい音楽の発信基地でもあるライブ小屋が、いよいよ邦楽に目を向け始めたということだ、今の日本の一つの音楽状況を物語っている。そこに登場する音楽はもはや邦楽、あるいは現代邦楽というジャンルでは捉えられない、新しい(新鮮な?)音楽と目されているようだ。

「スタジオ錦糸町・スタジオams」

四月から毎週一回以上のペースで始まったのが、西武系の「スタジオ錦糸町」と「スタジオams」。

「スタジオ錦糸町」の方は「トーキー・サウンド・ルネッサンス」と題するシリーズで、バンドの形式を主体にした日本の音で、現在のポップシーンに新風を巻き起こそうというもの。

仲林光子(箏・横笛)とシター、パーククションによるオリジナルライブ(4/1)を皮切りに、中村明一(尺八)、ギター、キーボード、ベースという編成の「ネオ・オリエンタル・セッション」に民謡歌手と津軽三味線が絡んだライブ(5/8)、宮下伸(箏・三十絃)、佐々木壮明(津軽三味線)、中村明一の「宮下伸邦楽アンサンブル」に二胡の許可とサククス・バスタラリネットのネットド・ローゼンバークが絡んだライブ(6/2)、川村昌子(箏)と越智義朗(パーカッション)が加わった井上鑑(作

曲・キーボード)のオリジナルライブ(7/27)といった具合で続く。

三軒茶屋の「スタジオams」の方は「日本の音……翔んだ」と題するシリーズで、小編成のものを中心に型破りな日本の音楽を紹介しようというもの。

「宮下伸邦楽アンサンブル」+ YASUKAZ(パーククション) 4/3、三味線ロックの「国本武春」4/14、太鼓の「ケニ」・遠藤+佐藤通弘(津軽三味線)・中村明一(6/1)、沢井合奏団の精鋭、川村昌子・井原潤子・樋口真知子・宮崎孝子・和久文子による「箏五人展」の現代邦楽(6/22)、久東寿子・佐藤由香里他、野坂恵子門下による「二十絃箏(オリジナル)ライブ」(7/2)といった具合で続く。

「横浜STスポット」

横浜駅そばに二年半前オープンしたSTビルの地下一階「STスポット」も目が離せない。三月から始まった「アジアの音を探る」シリーズは、アジアの古典楽器の新しい魅力を発見しようというもので、「宮下伸邦楽アンサンブル」(3/2)、二胡の「姜建華」+李暁之(揚琴)・花房はるえ(箏) (3/9)、カヤグムの「池成子」(6/22)、笙(日本・中国)と続いでいく。

STスポットではこの他にも「ネットド・ローゼンバーク+沢井一恵」(6/6)、「国本武春ライブ」(7/6)など、意欲的な企画が進行中だが、「国本」の方は、三、四ヶ月に一回のペースでシリーズとして行う予定という。国本自身やる気満々で、今、題材を求めて横浜を探索中というから、STスポットならではの企画画となりそう。「抱腹絶倒・黒船物語」なんか聴けるかも。

「渋谷ジャン・ジャン」

「スタジオ錦糸町」「スタジオams」「横浜STスポット」は新たに注目すべきライブ小屋として紹介したわけだが、古参の渋谷「ジャンジャン」、西武池袋「スタジオ200」でのライブももちろん健在だ。

「ジャン・ジャン」では、今年八十歳を迎えた津軽三味線の高橋竹山、昨年NHK紅白にも出場した伊藤多喜雄、江戸時代の三味線歌謡を歌い続ける桃山晴衣、昨年八月に二十絃ライブを最終させた野坂恵子、白熱の三十絃ライブを展開する宮下伸たちの演奏を聴かせている。

ライブの楽しさは演奏の他、トークにもあり、また、低料金(どこの小屋でも、前売り1800円、当日2000円)というのが相場)ということもあって、会場はいつも一杯、熱気に満ちている。

佐藤通弘・栗林秀明
田嶋直士

津軽三味線の新しい展開を求めて活動を展開する佐藤通弘は、「銀座小劇場」と提携して、二月から偶数月、年六回の予定で、「津軽三味線・異種楽器インプロヴィゼーション」シリーズを始めている。「RODAN」と題する公演では、これまで中村達也（ジャズドラム）、天鼓（ボイス）、斉藤徹（ウッドベース）、望月太喜之丞（縮太鼓）他がゲスト参加して、新しい音楽の創造に挑んでいる。

即興演奏グループ、栗林秀明（十七絃）+佐藤通弘+斉藤徹+広木光一（ギター）の「弦楽四重奏団」は三月から月二回のペースでライブを、また六月は栗林・斉藤にアートアンサンブルオ

ブシカゴのジョゼフ・ジャーマンが加わり、七ヶ所でライブを行うという精力的な活動を展開する。

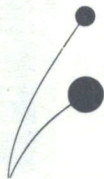
この他にも、琵琶の後藤幸治とそのグループ（尺八・箏・サックス・パーカッション等）が続ける、新宿「シアターブルー」でのライブ、尺八の三橋貴風のグループ「無頼人」(ピアノ・ベース・サックス・ドラムス・パーカッション)が続ける吉祥寺「まんだらII」でのライブなどたくさんある。

このようにライブを眺めてみると、邦楽器と異種楽器の組み合わせは、もはやフュージョン、クロスオーバーという言葉をとさら使う必要のない、あたり前の時代になっていることが窺える。最後に一つ、「これぞ邦楽ライ

邦楽 Journal
Hogaku
ジャーナル

尺八・箏・三味線の
月刊イベント情報誌
includes information
in English

全国から集めたホットな
コンサート情報を中心に、
今注目の演奏家への本音の取材、
邦楽器の不思議な特性の解明、
邦楽界の諸問題等、
身近な邦楽情報を満載！
今、邦楽はおもしろい。



●バックナンバーのご案内

- 41号(90年6月)ー見てわかる三味線史
- 40号(90年5月)ーワールドミュージック
- 39号(90年4月)ー演奏会のやり方
- 38号(90年3月)ー伊藤多喜雄・国本武春
- 37号(90年2月)ー邦楽CDリスト
- 36号(90年1月)ー邦楽界に望むこと
- 35号(89年12月)ー一元制度を考える(後)
- 34号(89年11月)ー一元制度を考える
- 33号(89年10月)ー邦楽の仕掛人たち
- 32号(89年9月)ーどこかどう違う
- 31号(89年8月)ー大衆と邦楽
- 30号(89年7月)ー日本の音楽文化
- 29号(89年6月)ー子供の音楽
- 28号(89年5月)ー琵琶
- 27号(89年4月)ーこんなアイデアはか?
- 26号(89年3月)ー邦楽のプロとは(後)
- 25号(89年2月)ー邦楽のプロとは(前)
- 24号(89年1月)ー正月の音
- 23号(88年12月)ー忠臣蔵

定価=450円
年間購読=5400円
半年購読=2700円

(送料サービス)

★26~16号までは定価350円

発行/邦楽ジャーナル

〒100 東京都新宿区高田馬場3-34-17
ベルメゾン宇野101 ☎03-360-1329
郵便振替口座:

東京3-361943 邦楽ジャーナル

★お求めは全国の和楽器店、
または直接邦楽ジャーナルにお電話を。

【空前の創立記念演奏会】

ライブ以外で注意を引きつけたことと言えば、大派閥の創立記念演奏会が四月・五月にたてつづけに行われたこと。

米川敏子の研箏会は七十周年記念をへ4/29、山川美和子の春和会は六十周年記念をへ4/30、萩岡松韻の萩岡会は百周

年記念をへ5/3、それぞれ国立劇場で行った。特に萩岡会は、松本幸四郎や市川染五郎が出演したり、東京交響楽団と協演したりと、大がかりなものだった。



尺八行脚を続ける田嶋直士

飛ぶ鳥を落とすが如くの沢井箏曲院の勢いを見せつけた。



現代邦楽に新たな光を投げかける「箏五人展」



銀座小劇場で異種楽器と即興演奏を繰り広げる佐藤通弘

日本音楽集団 1989年11月～1990年6月の主な活動記録

日本音楽集団及び団員等の今後の予定

11月2日(木)	第110回定期演奏会	有楽町朝日ホール
11月3日(金)・4日(土)	上山公演	上山市民会館
11月6日(月)～10日(金)	栃木県巡回学校公演	
11月12日(土)～26日(日)	第17次海外公演(ユーロパリア'89ベルギー公演)	
11月17日(金)	本田賞授賞式	ホテルオオクラ
12月3日(日)	安城公演	安城市センター
12月8日(金)	頌栄女子学院音楽鑑賞会	
12月12日(火)	第112回定期演奏会	パリオホール
1990年1月1日	とうきょうエキコン「年越しミッドナイト・コンサート」	東京駅丸の内北ローム
1月9日(火)	関市中学生音楽鑑賞会	関市文化会館
1月15日(月)	国立市成人の日記念コンサート	くにたち市芸術小ホール
1月28日(日)	水戸公演	常陽藝文ホール
2月5日(月)	第112回定期演奏会	パリオホール
3月19日(月)	No.32サロン・コンサート	アコスタディオ
3月29日(木)	東京交響楽団現代日本音楽の夕べ「三木稔の世界」で「急の曲」を演奏	シリーズⅧ サントリーホール
4月3日(火)	No.33サロンコンサート	アコスタディオ
4月15日(日)～17日(火)	第18次海外公演(台湾)	
4月26日(木)	第113回定期演奏会	パリオホール
5月15日(火)～25日(金)	長野市巡回学校公演	
5月28日(月)	邦楽器による日米交流コンサート	A B C 会館ホール
5月31日(木)	柏崎常盤高校音楽鑑賞会	
6月4日(月)～9日(土)	高松市巡回学校公演	
6月9日(土)	上神明小学校音楽鑑賞会	
6月10日(日)	志度町公演	志度音楽ホール
6月11日(月)～12日(火)	三条市公演	三条市中央公民館
6月12日(火)	神戸公演	神戸文化ホール
6月15日(金)	フォーラム21・一宮公演	一宮勤労福祉会館

6月19日(火)	第114回定期演奏会	津田ホール
6月25日(月)～29日(金)	長崎県巡回学校公演	
6月28日(月)・29日(金)	「第八回現代日本音楽の展開」の「笛の会」(尺八の会)に集団団員が多数出演 国立劇場小劇場	
6月30日(土)	〈邦楽百番(NHK)で吉村七重・木村玲子が松本雅夫作曲「二面の二十絃による「霜月」を演奏	
7月6日(金)	〈二十絃ライヴ#1〉に久東寿子、佐藤由香里が出演	
7月19日(木)	No.34サロンコンサート—I期生シリーズ①	ルーテル市ヶ谷センター
8月4日(土)	〈吉村七重・二十絃の夕べ〉	アコスタディオ
8月7日(火)	古座川町(和歌山県)公演	
8月23日(木)	No.35サロンコンサート—I期生シリーズ②	
9月3日(月)	〈野口美恵子・三味線の夕べ〉	アコスタディオ
9月4日(火)	〈草津国際音楽アカデミー・西村朗作品個展〉で吉村七重が「独奏二十絃と弦楽のための協奏曲」を演奏	草津天狗山レストハウス
9月3日(月)	No.36サロンコンサート—I期生シリーズ③	
9月4日(火)	〈野口美恵子・三味線の夕べ〉	アコスタディオ
9月9日(日)	No.37サロンコンサート 若葉マーク・コンサート その3	アコスタディオ
9月9日(日)	畦地慶司胡弓リサイタル in 札幌	
9月19日(水)	札幌ルーテルホール	
9月27日(木)	第115回定期演奏会	パリオホール
10月1日(月)～5日(金)、11日(木)～13日(土)、15日(月)～19日(金)	栃木県巡回学校公演	
10月14日(日)	浪速高女同窓会	赤坂プリンスホテル
10月14日(日)	〈オーケストラと邦楽器の名手たち〉で、三木稔作曲「破の曲」を吉村七重が、広瀬量平作曲「尺八とオーケストラのための協奏曲」を三橋貴風が演奏(東京交響楽団・指揮 松尾素子)	板橋区民文化会館大ホール
10月20日(土)	つくば国際音楽祭	ノバホール
10月24日(水)	畦地慶司第10回胡弓リサイタル	市ヶ谷ルーテルホール
10月25日(木)	福島公演	福島市音楽堂
10月29日(月)	木村玲子二十絃箏リサイタル	パリオホール
10月30日(火)	仙台学校公演	
11月2日(金)	三橋貴風・吉村七重ジョイントリサイタル	
11月3日(土)、4日(日)	琵琶「半田淳子の世界」	幕張メッセ・展示会場特設ホール
11月6日(火)	第116回定期演奏会	都市センターホール

製 造 直 売

琴・三味線

- ❖ 琴糸締
- ❖ 三絃張替
- ❖ 象牙製品

やまと



旗の台駅東口<定休日>日曜・祭日 三味線
池上線改札口1分 **787-3341**

介護費用保険

新発売



健康はご家族の大きな財産。
だから備えが必要です。

- ※ 損害保険の安田火災はあなたの暮らしをワイドに補償致します。
- ※ あなたの保険設計は明和損害保険企画におまかせ下さい。

日本音楽集団指定損害保険代理店
明和損害保険企画

RM 小笠原 明男 オフィス ☎937-0547
安田火災海上保険(株)城北支社 ☎962-7311

琴・三絃

一 藤

ローン・下取り・修理致します。

[八千代店] 〒276 千葉県八千代市
八千代台東3-24-4
☎0474-84-8859

[調布店] 〒182 東京都調布市上石原
1-6-14
☎0424-84-0092

日本の響
真山銘尺八

〒561 豊中市服部本町5丁目5-6 TEL(06)863-0564

デザイン
永谷繁山

邦楽器全般

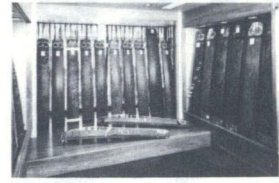
わらびみや
楽器店

〒598 泉佐野市栄町6~11
TEL 0724(63) 1246

創業・昭和8年

お琴・三味線の琴栄

●東海一の実績を誇る店



◇1階・店舗

- ◇三味線、尺八、舞扇、多数陳列
- ◇お琴、三味線、尺八の付属品、楽譜 多数取揃えてあります

◇2階・お琴展示場(ミニ舞台付)

- ◇お琴、柱目琴、20絃琴、17絃琴と豊富に取揃えてあります
- ◇ミニ舞台でお琴を弾いて下さい

〈お買い求め〉 クレジット販売をご利用下さいませ。(最高36回払)
〈パンフレット〉 無料送付致します。



御琴・三味線専門
琴栄楽器店

代表・増田康壽
〒500 岐阜市司町九(大学病院前)
TEL <0582> ③1826 代



—お求めの音づくり—

タクザン

澤山銘尺八

尾崎沢山

〒108 東京都港区芝浦4丁目2-22
東京ベイビュウ218 ☎03-5476-4277
田町駅(山の手線、京浜東北線)歩9分
三田駅(地下鉄、三田線、浅草線)歩12分
〒005 札幌市南区澄川4条9丁目4-10 ☎011-582-8119



株式会社
琴の長澤

琴・三絃一式

京都・中京区四条旧御前通り上ル
TEL 〇七五・八二一・一三四五

応援します「邦楽現代」

和楽器専門店

老舗
KK金善楽器店

京都市東山区大和太路通り四條下ル二丁目亀田町五七

TEL

(075) 五六一一二九四〇 五四一一〇九三
五二五一一三七五(夜間)

八尺
露秋

西田露秋

〒794 今治市新谷甲 798-1
電話 (0898)48-1097・1257

信頼の品質

箏
三味線

田波楽器株式会社

〒537 大阪市東成区
東今里二丁目4-6

TEL 06(976)1885
FAX 06(974)9632

永い伝統と経験から創り出される
豊富な“止水の和楽器”



しすいの
和楽器

—新発売—
明鏡笛(しの笛)
(正律管)
ベース三味線

止水の和楽器 発売元

明鏡楽器

〒130 東京都墨田区横川4-1-2 ☎(03)623-6349(代表)

- 代表 長沢 勝俊
副代表 田村 拓男
運営委員長 尾崎 太一
事務局 田村 拓男(局長)
霜島 素子 文
奈良 義寛(参予)
芹沢 英雄
- 監事 芹沢 英雄
- 名誉団員 山田美喜子
- 団員連名
〔正団員〕
望月 太八(笛)
西川 浩平(笛)
宮田耕八朗(尺八)
坂田 誠山(尺八)
三橋 貴風(尺八)
- 藤崎 重康(尺八・笛)
竹井 誠(尺八・笛)
米澤 浩(尺八) 文
水川 寿也(尺八) 運
畦地 慶司(胡弓・作曲)
野口美恵子(三味線) 文
大田 幸子(三味線) 運
大田 幸子(三味線) 運
大田 幸子(三味線) 運
田中悠美子(三味線) 文
工藤 哲子(三味線) 文
半田 淳子(琵琶) 運
田原 順子(琵琶) 運
坂田 美子(琵琶) 運
坂井 敏子(三味線・胡弓)
白根きぬ子(箏)
吉村 七重(箏)
花房はるえ(箏・三味線)
宮越 圭子(箏)
- 木村 玲子(箏)
内藤 洋子(箏)
熊沢栄利子(箏)
大島菜穂子(箏)
佐藤由香里(箏)
尾崎 太一(打楽器) 運
堅田 啓輝(打楽器)
高橋 明邦(打楽器・指揮) 運
黒坂 昇(打楽器)
細谷 一郎(打楽器)
田村 拓男(指揮・打楽器)
運・文
稲田 康(指揮)
長沢 勝俊(作曲)
内田とも子(作曲)
秋岸 寛久(作曲)
中島 隆(楽器係)
- 〔準団員〕
水谷 雅康(尺八)
添川 浩史(尺八)
山田まゆ美(琵琶)
佐藤 里美(箏)
島崎 春美(箏)
久東 寿子(箏) 文
高橋はるな(箏)
桜井 智水(箏)
安武由香理(箏)
山田 明美(箏) 文
前田 文男(打楽器)
望月太喜之丞(打楽器)
- 〔研修生〕
坂口 美香(三味線)
西原 祐二(ヒチリキ・笙)
西原 貴子(笛)
外山 香(箏)
白杵美智代(打楽器)
- 協力団員 伊藤 惣一
地方在住団員 田嶋恵美子
- 一九九〇年四月一日現在
- 〔本年度委員〕
運印 運営委員
文印 文芸部

〔賛助会員〕
(株) みやこ編物

- 滝沢 修 霜島 邦子 増田 啓子
野坂 操寿 古川羽衣山
鶴田 錦史 丹野井成寿

〔団友〕

- 青木 誠 芹沢 英雄 増田 睦美
秋浜 悟史 高野 文子 三木 稔
荒谷 俊治 田嶋 直士 宮本 幸子
稲垣 隆史 田中 利光 元橋 康男
小田切清光 鶴野 和子 矢崎 明子
川崎 祥悦 戸井 昌造 柳家小三治
菊地 徳子 藤舎 呂悦 横山 勝也
楠 知子 藤舎 呂船
鞍掛 昭二 仲俣申喜男
鯉沼 広行 中村 八大 デイヴィッド・ロップ
佐藤 敏直 野口 鎮 ヘンリー・バーネット
芝 祐靖 広瀬 量平 ラニー・シエルダン
清水 義矩 福田 輝久 王 燕樞
杉浦 弘和 鳳声 晴由 張 晚輝
砂崎 知子 星 旭

〔日本音楽協会支部〕

- 関西支部 田嶋直士
水戸支部 齊藤幸山
長野支部 佐藤幸宇山
山梨支部 郷晃
長崎支部 牧山雅楽部
熊本支部 古川羽衣山
秋田支部 野口裕子

●本誌24号の広告掲載者御芳名

- ㈱アイダ楽器・浅野太鼓・一勝・いづみや楽器店・大瀧
邦楽器・尾崎沢山・南家庭音楽会出版部・KJ金善楽器店
・木村莞山・琴光堂和楽器店・倉持楽器店・琴栄楽器店
・㈱琴の長澤・田波楽器株式会社・水廣真山・西田露秋
・邦楽ジャーナル・明鏡楽器・明和損害保険企画・やま
と邦楽器店・郵船航空サーブイス株式会社・㈱ワダ楽器

編集後記

日本音楽集団の代表を長年にわたってつとめていた長沢勝俊が、このたび紫綬褒章を受章したことは日本音楽集団にとっても大変嬉しいことでした。
「邦楽現代」24号が新装丁にして再出発しようとしているこの時機に受賞のニュースが飛び込み、お祝いのページが持てたのもラッキーでした。日本音楽集団もこれをステップにして一層はばたきたいものです。
機関誌「邦楽現代」をより多くの方々に読んで頂きたいの思いから、今回から採算度外視の低料金で配布することにしました。
編集部

邦楽現代 Pro Musica Nipponia 第24号

定価 二〇〇円
一九九〇年六月十九日発行
発行所 日本音楽集団
東京都渋谷区笹塚3-17-11 滝沢ビル302
〒151 電話 〇三三三七八一四七四一
発行責任者 田村拓男
印刷所 光藍社

長沢勝俊作品集

◎待望の長沢作品を縦譜化

No.1 飛騨によせる三つのバラード	800円	No.11 箏協奏曲	700円	〔尺八譜〕	
No.2 まゆだまのうた	400円	No.12 雪三態	800円	飛騨によせる三つのバラード	400円
No.3 合奏曲 六段	600円	No.13 北国雪賦	900円	まゆだまのうた	300円
No.4 春三題	600円	No.14 樹冠	700円	秋によせる三つの幻想曲	400円
No.5 秋によせる三つの幻想曲	600円	No.15 萌春	500円	六連星	300円
No.6 箏のしらべ	500円	No.16 合奏曲みだれ	700円	二つの田園詩	300円
No.7 合奏曲 千鳥	500円	No.17 合奏曲八千代獅子	600円	樹冠	300円
No.8 六連星	400円	No.18 箏四重奏曲	700円	萌春	400円
No.9 箏三重奏曲	600円	No.19 四つの小品	700円	四つの小品	400円
No.10 二つの田園詩	500円				

(有) 家庭音楽会出版部

〒810 福岡市中央区博多2-15-20
☎(092)741-2458 振替口座福岡8-5500

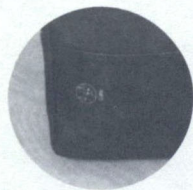


軽くて、丈夫で、機能的な防水カバー！ ナイロンソフト琴カバー

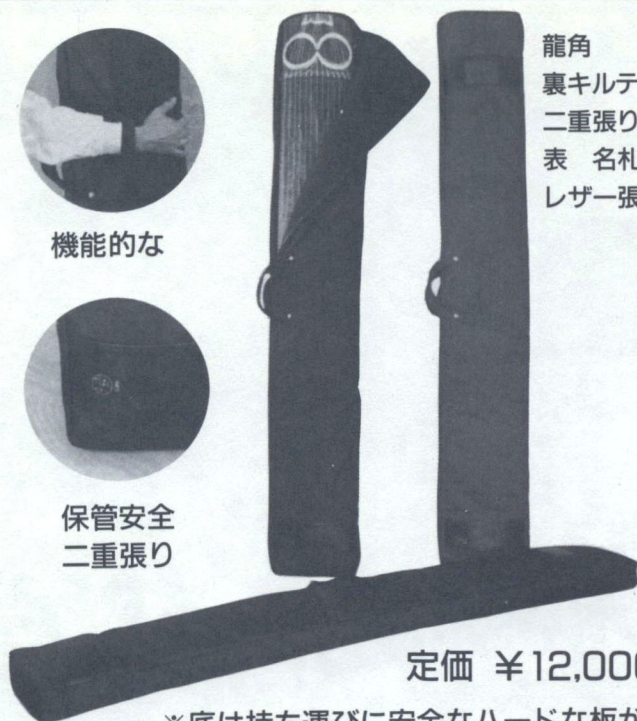
龍角
裏キルティング
二重張り
表 名札上下
レザー張り



機能的な



保管安全
二重張り



定価 ¥12,000.

※底は持ち運びに安全なハードな板が付いています。

日本の音、
その磨きぬかれたひびき



尺八

蝴蝶

コチョウ



株ワダ楽器

〒939-18
富山県東砺波郡城端町信末451
TEL (0763)62-2348(代)
FAX (0763)62-3878

◆蝴蝶尺八、総合カタログ等ご希望の方はご一報ください。

箏

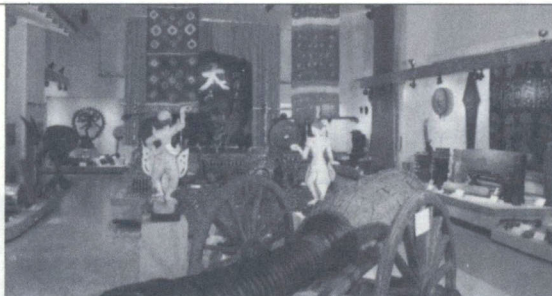
二十絃箏

箏を愛するすべての人の繊細な感情を忠実に音に表現するために、楽器の本質を追求した箏

日本音楽集団推薦

琴光堂和楽器店

東京都目黒区碑文谷2-19-15 TEL(792)8481 FAX(792)8437



太鼓の里資料館

太鼓の里

商標登録

太鼓  御神輿

株式会社

浅野太鼓

浅野太鼓祭司株式会社

本社 〒924 石川県松任市福留町 TEL(0762)77-1717代
松任ショールーム 松任市水澄町100-1 TEL(0762)77-1277
FAX(0762)77-2228